

「むかし鉄労、いま動労」

全国の動労組合員みなさん。
七月八日、早朝四時に津田沼電車区構内で起こったことこそは、今日の動労「本部」反動分子の権力との腐りはたユ着を満天下にさらけ出すものです。
いま、千葉管内の各職場では、あたり前の感性をもった労働者は、動労千葉、国労を問わず、「むかし鉄労、いま動労」という軽蔑をこめた言葉をもち、動労の名をもって職場に権力を先導する「本部」反動分子への怒りが湧き上っています。
目前に迫った第三十七回全国大会において、全国の心ある動労組合員の声を結集し、方針案に示されている三十五万人体制攻撃に対する屈服をはじめとする路線的屈服と裏切りを糾し、権力とのユ着を糾さない限り、動労の労働組合としての未来がないということを、今こそ銘記しなければなりません。

落ちるところまで落ちた動労

早朝四時に、警察権力と示し合わせ、「本部」石津法対部長以下が弁護士をつれて津田沼構内に登場し、出・退勤の動労千葉および国労組合員に「通路を通るな。目をつむって通れ。何も見るな。公務執行妨害だ。」とどう喝してまわる機動隊に守られ、背番号のゼッケンをつけた四十名の私服権力とともに、権力に労働者を売り渡すための「迷演技」を再現する嶋田、斉藤吉等の反動分子の姿は、権力に身も心も売り渡した者の末路を示してあまりあるものであり、急を聞いてかけつけた多くの動労千葉・国労の組合員の新たな憤激を呼びおこしています。

嶋田、斉藤吉等の革マル分子以外の「本部」派組合員は、この事態の説明も解釈もできないまま茫然自失の状態にあり、デッチ上げ「地本」の解体状況は、この「告訴」を通じてさらに促進されています。

動労千葉の勝利によって 引きずり出されたファッショ的本質

前号（全国版No.88）で明らかにした通り、このデッチ上げの告訴路線は、動労千葉銚子支部の結成によってこの間の組織闘争の完敗を刻印されたが故に、「本部」反動分子の本来の体質が引きずり出されたにすぎません。
動労千葉は、この組織闘争の相手が「本部」革マル分子である以上、そのセクト的体質＝権力とのユ着を路線化するファシストの本質から、われわれの勝利の決定的段階において、必ず今回のような暴挙に出てくることを想定し、この権力・当局と一体となった反動を打ち破ることなしに

最終的勝利はあり得ないことを自覚しつつ闘い抜いてきました。

従って、今回の鉄労以下の告訴の事態は、われわれが勝利しつつあることの何よりの証左であり、しかも、敵が正常な労働組合のベールを自らかぶり捨ててに等しい告訴という手段を、何の確証もない、まさに、デッチ上げとしか言いようのない状態の中で発動せざるを得ないところまで追い込んだのだということにより一層確信を深め、告訴された十名を先頭に労働運動の原則を踏まえ、断固闘い抜く決意です。

動労を正常な労働組合に戻そう！

全国の動労組合員みなさん。
「本部」反動分子のこのような権力とのユ着をこれ以上看過することは、血と汗で築きあげてきた動労三十年の戦闘的伝統を破壊するのみならず、労働組合としての動労の死をも意味しています。
第三十七回全国大会を期して、この腐臭を放つ「本部」反動分子の権力とのユ着に断を下さない限り、全国の動労組合員の未来はありません。

「むかし鉄労、いま動労」などという軽蔑をこめて、全ての労働者から指弾されるような動労にしてはなりません。動労を正常な労働組合に戻すために、動労大改革へ向けてともに奮闘しようではありませんか。

